

カメラ散歩と

利根運河

池上 均 陸自73

はじめに

私は65歳を過ぎ、第2の職場を終えてから所用のない日と雨の日以外は、健康管理のためウォーキングを楽しんでいる。

成人病の代名詞といわれる高血糖、高コレステロール、54歳での急性心筋梗塞による心臓への6本のステント挿入などから、必要に迫られたウォーキングでもあった。

運よく自宅400m程の所に利根運河があり、河畔には遊歩道があるから歩くには好適でもあった。

利根運河の歴史

江戸時代から明治に入り、銚子沿岸以北から東北地方の東京への物流は利根川を遡り関宿から江戸川を下るルートが主流であった。

明治時代に入り現在の柏市、流山市と野田市境界付近の約8kmに運河を建設すれば、2日の時間節約が図られる。そこで明治21年、オランダ技師ムルデルにより約57万円（現在価値で約130億円）と延べ220万人が投じ

られ、明治23年に通水した。

当時としては珍しい巨大な民間運河会社の設立である

利根運河と志摩万次郎

この事業には2代目社長志摩万次郎を語らねばならない。現偕行社会長志摩篤氏の祖父である。

もともと日本製鉄の事業に力を注いでいた志摩氏ではあったが、この事業を見捨てる事が出来ず、個人資産まで投じて完成させた。また彼は、完成の後、利根運河の隆盛を見ることなく、米国に渡っている。

その後の鉄道の発展もあって、運河事業は衰退し、昭和16年の台風による水害から、利根運河は治水対策として国に買収され、一般河川として国有化され、現在に至っている。

利根運河のウォーキング

私のウォーキングは3時間余りが目標だ。歩数にして約1万5千歩から1万8千歩。

おおよそ1カ月の歩行距離は約250km、年間3000km、を歩く。遊歩道は自転車と徒歩に制限され、極めて安全なコースである。

自宅から利根運河に向かいその遊歩道を東に向かって利根川方向に行くか、西に向かって江戸川方向に行くかはそ

の日の気分次第。

気分転換のために途中で住宅街にも進入するアレンジコースもいくつかある。そこでの新たな出会いも楽しく、毎日の刺激になっている。

カメラ携行のウォーキング

健康管理と体力維持だけのウォーキングでは飽きてくる。そこで考え出したのがカメラの携行だ。

カメラを携行すると自然の景色が気になり始めた。

毎日どんな花や野鳥に出会えるか、どんな景色に出会えるか、美しい自然をどんな画面に収めるのが楽しみとなった。

ウォーキングの時刻は、早朝、午前、午後、それぞれ違う風情が楽しめる。朝霧の立ち込める景色、富士山の頂上に太陽が沈む冬至の頃も感動だ。

季節の違いにより現れる野鳥たちの出会いも楽しみになった。

次第に、安価で軽量のデジカメからは携行できる限界の300mmズームレンズ付きの一眼レフを持ち歩くようになった。

ウェストバッグには接写用のマクロレンズ、途中で山菜等を収穫できた時のためのビニール袋とナイフ、そして水分補給のためのドリンクを入れる。

見つけた花々は約3百種にのぼる。

野鳥は、美しいカワセミやルビビタキ、猛禽類のオオタカ等々、60種は見つけることが出来た。それぞれの名前を探し出すのも苦労はあるが、判った時の喜びは何物にも代えがたい。

カメラ携行のウォーキングは身体の健康だけでなく、精神の健康にも最高の薬だと確信する。

美しい自然を切り取れた時、新たな野鳥や山野草を見つけた時、あるいは出かける瞬間から今日の出会いに心を躍らせることが出来るのである。

今はスマホにカメラが付いている。一眼レフカメラでなくとも、3時間という長い時間でなくともお勧めしたいカメラ散歩である。

編集委・池上氏の成果は『偕行』昨年3月号の表紙を飾りました。

